

## 「石壕吏」(杜甫)の実践報告

——謎解きをしながら——

加藤 昌 孝

はじめに

二〇一〇年(平成22年)の学習指導要領改訂によって、新たに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が設定され、二〇一二年(平成24年)から小学校一・二年生の「神話」を初めとして小学校教科書に様々な古典・漢文教材が掲載され、中学・高校においてもこの事項は同様に設定され強調されている。そうした国語科をめぐる動向を視野に入れて実践した報告を「同志社香里『教育研究誌』第36号」で報告した。以下の文章はその実践報告を紙数の都合で簡約し一部字句の訂正を加えたものである。

二〇一〇年度初め(一学期中間考査までの高校二年生)に「公憤慨世の唐詩」と題する自主編成教材を作成し、杜甫の「石壕吏」・「兵車行」、白居易の「重賦」・「新豊折臂翁」を配した。杜甫の詩は

「石壕吏」(杜甫)の実践報告

教科書(東京書籍「精選古典」)掲載の教材、白居易の詩は「中国詩人選集12「白居易上」13「白居易下」・岩波書店」を用いた。

これらの詩はいずれも為政者の暴挙や無謀な征戦(侵略戦争)を批判し、重税に喘ぐ民の現実を見据えた「社会詩」(白居易は自己の詩を〈諷諭詩〉と名づけ、他の〈感傷詩〉〈閑適詩〉〈雜律詩〉以上にこの諷諭詩を誇りとした)である。

内容的に平明な詩ではあるが、長詩(古体詩)であり高校二年生に適するかと不安を抱きながらも、時空を超えて呼びかける杜甫と白居易のメッセージを、生徒に届けたいと願い教室の教材とした。

### 一 「石壕吏」の時代背景

天宝十四歳(七五五)安祿山の乱が勃発し、翌年(七五六)反乱軍が長安に迫る。その報が届くと玄宗は楊貴妃と側近の兵とともに

西方に脱出する。この戦乱は八代皇帝代宗の宝応二年(七六三)に沈静化するが、「石壕吏」はこの戦乱の時代を背景とした詩である。

至徳二年(七五七)、長安を脱出した杜甫は鳳翔に赴き、肅宗の下に馳せ参じ左拾遺の官を与えられた。杜甫は左拾遺の任務を全うするために肅宗に諫言したが、皇帝の逆鱗に触れるところとなり、乾元元年(七五八)、華州の小役人に左遷される。この間に目撃した戦乱と庄政下に塗炭の苦しみを強いられた民の実相を描いたのが「三吏三別」の詩と呼ばれる連作の詩である。「石壕吏」はその連作の一つである。

東都洛陽方面への公務の旅をし、乾元二年(七五八)春、洛陽から華州への帰途、杜甫は石壕村に宿泊する。その宿で目撃した事件、徴兵の実相を「石壕吏」でルポルタージュする。

この詩を理解するには上記の時代背景を踏まえる必要がある。貧しいながらも平和な生活を送っていたであろう宿屋一家を襲った徴兵、悲惨な戦乱の実相を(読む)ためには不可欠の条件である。玄宗皇帝治世の末期から続く戦乱によって夥しい民が犠牲となった。杜甫が泊まった宿で目撃した事件はその悲劇の「こまであり、同様の事件が数多く起きたであろう」とは言うまでもない(「三吏三別の詩」参照)。そうした悲劇的な事件をすくい上げ、杜甫は「石壕吏」を作ったのである。この詩が有する時代的な象徴性を読み取る

には一定の「予備知識(時代背景の知識)」が必要であると考えた。

1 時間目 時代背景の概説と「場面分け(詩の構成)」

(一)教材プリントとともに時代背景の概説(次の「時代背景プリント」を配布説明した(傍線部は筆者が施した。以下も同じ)。

- ① 乾元元年(七五八)九月、すなわち 鄴城に安慶緒の軍が立て籠もる。
- ② 唐軍が鄴城を包囲する。詩の中に登場する老夫婦の三人の息子は徴兵され、鄴城の攻撃の一員として出兵する。
- ③ 乾元二年(七五九)三月、史思明軍が安慶緒軍を救援。二〇万の唐軍を破り、史思明は安慶緒を殺し安慶緒の勢力を吸収し併合する。
- ④ 大敗した唐軍は、黄河沿岸の要地「河陽」に城を築き防衛する。

(二)時代背景の概説後に、次の①～④を板書し、

- ① 語り手が宿で目撃したこと(事件の始まり)。
- ② 目撃したことに對する語り手の感想。
- ③ 老婆(＝作者創造の語り手)の語り。
- ④ 宿で起きた事件の顛末。

生徒に場面分け（詩の構成）について考察させた。授業における  
問答・対話（授業記録）は省略。

## 二 授業記録

——謎を追ひ、形象を豊かに結びながら

〈読み〉の方法は様々にあるが、この詩を推理小説的に「謎を追ひ」一つひとつの語句を丁寧・読み、教室の対話・問答を中心に据え、そして「イメージ読み（形象読み）」を目ざした。時空を超えて呼びかける作者の思想性（文学の永遠性）を生徒が認識してくれることを願った。紙数の都合で授業記録の一部（3時間目の授業記録は省略）を記す。

「石壕吏」の謎の設定（以下の項目のプリントを2時間目の授業開始時に配布した）。

- 1 「吏」はなぜ「夜」に「人を捉」えにきたのか。それは何のためか。「人を捉ふ」から受けるイメージは？
- 2 老翁が「牆」を「踰えて走」げたのはなぜか？
- 3 老婦が「看」というのは、誰に対して、どうすることなのか？
- 4 吏はどのように「怒」るのか？

「石壕吏」（杜甫）の実践報告

- 5 老婦はなぜ「啼く」のか？「苦し」いのはなぜか？
- 6 「室中に更に人無く」は、本当に誰もいないのか？
- 7 「母の未だ去らざる」はどうしてか？
- 8 「力衰ふ」老婦が、「吏に従ひて夜に帰かん」と申し出たのはなぜか？
- 9 老婦が「急に河陽の役に」行こうと申し出たのはどうしてか？
- 10 「泣いて幽咽する」のは誰か？
- 11 「走」げた老翁が、なぜ「別れ」の挨拶ができるの？老翁はどこにいたの？

右のプリントの謎解きを中心に授業を進めること、4句ごとに読むこと、内容によっては2句・6句に区切って読むこととし、同時にこのプリントを毎時間持参することを指示した。範読あるいは生徒の音読後に難解語の質問に答えたあと、謎解きの〈読み〉を展開した（以下の授業記録のTは加藤、他のアルファベットは生徒の姓の頭文字）。

2時間目の授業記録——「吏」の出現と「老翁」の逃亡の謎——  
T 前の授業でこの詩の時代背景と構成について確認しましたの

で、きょうは先ほど配布したプリントを中心に、「謎解き」をしながら読んでいきます。第1句から第4句まで、作者が宿で目撃した部分、事件の始まりが書かれている部分、O o くん、読んでください。他の人は難しい語句をチェックし質問してください。質問が多ければ多いほど内容がよくわかる……。O o くん、読んでください。(O o 読む)。分からない語句、O t さん、全部出してください。

O t 「投ずる」、「吏」、「牆」、「躓えて」、「看る」……。

——生徒提起の難解語の説明後に読みへ——

T たくさん、出してくれました。「求めよ、さらば与えられん」……。これからも遠慮しないで、この調子で。質問はみんなのためになる。みんなへの友情のために遠慮せずに……。いな、質問出すの、友情のためにやで……。ほかに、質問ないですか、みんなへの友情、ある人は……。O o くん、どう？ 何かある？

O k 「老翁」はおじいさん、でいいですか。

T そう。それでは、次にこの部分に「登場する人物」(板書)、押さえておこうか。K k さん、言ってください。

K k 「吏」と「老翁」、それに「老婦」。

T それでいいです。もう一人、「投ずる」の主語は？ もう一

人、大事な人いませんか。宿に泊まった人、事件を目撃した人は？ K w くん。「走」は「逃」(板書)と同じ。

K w 「旅の途中」の杜甫。作者。

T そうです。隠れていてわかりにくいのが、旅人の杜甫。この詩の「語り手」(板書)。それでは次に、登場人物たちの「述語」を全部挙げてください。K i くん、どうぞ。

K i 作者は「投ずる」、「吏」は「有り」、老翁は「走<sup>て</sup>げ」、老婦は「出でて」と「看る」。

T 老翁の述語、もう一つないかな。「走げ」の前に？

K m 「走げ」の前の「躓<sup>て</sup>え」。

T 正解。「躓え」も老翁の述語。いいかな。じゃあ、前の時間に配布したプリント見てください。「謎」の3までを今から、みんなに解いてもらいます。いいですか。……。その前に漢字の「捉」(板書)の上に一字加えて、熟語をつくってください。ヒント、野球のキャッチャー、日本語で何ていうの。

野球部のA O くん。

A o 捕手。

T そう、その「捕」を上につけて「捕捉」(板書)、これ、「つかまえること」(板書)。それでは、いよいよ「謎解き」、「謎」の1「吏」は、なぜ「夜」に「人」を「つかまえ」に

来たのかな。「夜」に来たのは、なぜ？

K r 「夜」なら暗くて逃げられない、捉まえやすい……。

T ほかにどうですか？ S aさんは？ 「吏」はなぜ「夜」に来たのかな？

S a 「夜」なら「人」がいる……。家でゆっくりしている……

T どうして、夜なら人がいるの……。S oさん。

S o 夜、人は家に帰っているから、家にいると思う。

T 仕事で帰れない人もいるけど、たいていの人は夜、家に帰るわな。君らは夜遊びしてるけど（笑い）。今、笑った人は、確実に夜遊びしている人（笑い）。早く家に帰れよ……（笑い）。次、S nくん、どう？

S n 夜なら確実に人が家にいるから、捉まえやすい。

T K rくん、「夜」には捉まえる相手が確実にいるので、人を捉まえることができる、これでいいですか？ 「人」は、誰ですか。「吏」が捉まえようとする人？ K uくん、誰？

K u 宿の人。老翁。

T そう、老翁はどうした？ T aくん……。

T a 牆かきを踰こえて逃げた。

T S iさん、どうして逃げたの、謎の2、逃げた理由は？

S i おじいさん、なんか、悪いことしてたから、役人を見て逃げ

た……。泥棒か、なんか……。それで、役人が捉まえてきた。おじいさん、何か悪いことしたんで、役人が来るのを見て牆かきを踰こえて逃げた……。

T 何か悪いことしたので、役人が捉まえてきた……。おじいさん、ほんとに、悪いことしたのか、もう少し、先を読んでから考えようか。新しい「謎」をS iさんが出してくれた。<sup>⑤</sup>

「おじいさんは、悪いことをしたのか」(板書)。「謎」の2に加えてください。「謎」1に戻りますが、「人を捉ふ」を、時代背景のプリント④を参考にして考えてください。S uくん、その部分を読んでください(S u 読む)。おじいさんを捉まえて来たのは何のためか、S uくん、何かわかった？

S u 兵隊にする人、捉まえてきた……「河陽」で戦うために……。

T この点、確認してください。「河陽」で「史思明軍の攻撃を防衛」(板書)、そのために兵隊が必要……。このこと、どう

思いますか？ 誰でも、自由に……。

A s おじいさんも捉まえて、兵隊にするんですか？

N o 兵隊にする人を捉まえてきた……。なんか、ひどい、いきなり……。

M a おじいさん、役人が来るの、見て、それで逃げた……。

H a 「夜」、おじいさんが家にいるから、確実に捉まえられると計

算して、それで夜にきた……。

T まだある？

Kw 作者が泊まったこの宿には、おじいさんしかないない、男は。

それでおじいさんを捉まえに……。

T 鋭い……。その点は、あとを読むときに考えることにします。

「宿には、男はほかにいないのか？」(板書)悪いことしたおじいさんを捉まえるんじゃないなくて、兵隊にするために役人が捉まえにきた……。Siさん、これで、いいかな。悪いことしなくても、役人が捉まえにきた……。Siさん、いいですか。

Si おじいさん、戦争に連れて行かれるの、嫌で逃げたんですか。

何も悪いことしてないのに……。戦争に行ったら、死ぬかも  
しれないし……。それで逃げた……。

T じゃあ、次の謎、老婦の「看」る、相手は？ Taくん。

Ta 役人の前に出て応対する。

T 「謎」3の答え、正解。その様子を、宿に泊まった旅人、語り手が見ている。5句と6句、語り手が目撃したことに對する感想の部分。Nmさん、読んでください。わからない語句、あとで出してください。いつも言ってるように「求めよ、さらば与えられん」やぞ。(笑い)。(Nm 読む)。Niさん、

わからない言葉は？

Ni 「呼ぶ」、「二に何ぞ怒る」、「二に何ぞ苦しき」

◆生徒にとつては、「二に何ぞ」の理解が難解のようである。以下のように板書を多く用いて説明した。説明のあとに〈読み〉に入った。

T 「二に何ぞ」、難しいわな。丁寧に説明します。「二」は、数詞ではなく、ここでは「副詞」(板書)。「まったく・なんと」(板書)。「何」は疑問語、「理由」(板書)を表す。5句は、「呼ぶ」を「さけぶ」と読ませてるから「大声を出す」(板書)役人の声に対して、「どうして、大声でとなりつけるのか」(板書)。6句は、老婦の様子に對して、「どうして苦しそうに泣いているのか」(板書)。5句と6句は、「対句表現」(板書)。「吏」と「老婦」の様子や感情が対照的に表現されている。いいですか。「聴」は、旅人が「耳を澄ませて聞く様子」(板書)を表している。じゃあ、今日の授業の最後、みんなに質問します。二人の様子、イメージして、自分の言葉で言ってみてください。Nkくんから順番に……。5句から……。謎の4の部分です。

Nk 役人が、ものすごく怒っている。大声で……。

T Nkくん、この時の役人のセリフ、言えるかな……。

N k ……じじい、早く出てこいや、家の中にいるんやろ。わかっ  
とるんや、さっと出てこいって……。

T すこい。雰囲気出てる、役者になれるかも。関西弁で言った  
かは知らんけど（笑い）ほかには……。

N o じいさん、出てこいって、怒鳴り散らし威張ってる。

H g どうしても、連れて行くぞって、しつっこく叫んでいる。連  
れて行くのが役人の役目、上の命令でやってきたから。

T 「謎」4、役人の怒りの理由、兵隊に連れて行く老翁が出て  
こないから、でいいかな。それに対して老婦の様子はどうか  
な？ 「謎」の5、H hさんのイメージは？

H h 泣きながら、おじいさんは、家にいないとわめいているよう  
な感じ……。

T H yさんは？

H y 戦争に行かせたくないから、役人に連れて行かないでってお  
願っている。

T H rくんは、どんな様子、イメージは？

H r 役人にくっつかかっている、というか、負けていないとい  
うか……。食い下がっている、泣きながら、苦しそうな顔をし  
て……。

T その役人と老婦とのやりとり、7句は、役人の前で言う言葉

を、語り手が耳を澄まして聞いている……。次の時間は、  
「老婦の語り」（板書）の部分（読み）ます。「老婦の語り」  
から、「謎」の5の老婦が「苦しうに啼く」理由が、わか  
ると思います。K wくんが言ってくれた「宿の男はおじいさ  
ん」だけ、もはっきりします。次の時間は8句からの「老婦  
の語り」を読みます。じゃあ、終わります。

3時間目——難解語の逐語訳的な授業展開をした。

8句の「戍」は「兵器を持って国境を守ること」（板書）を説明  
し、老婦の三人の男子が徴兵され「鄴城」守備に出征していること  
を説明した（「謎解き」5から9の授業は、「謎」の8・9が時間不  
足で次の時間に残った。紙数の都合で「授業記録」は省略）。

4時間目の授業記録

——「老嫗の申し出」と作者の「思い」を中心に——

T 前の時間は予定通り、といっても私の勝手な予定ですが、予  
定通りに進まなかったため、今日の授業は、ちょっと、忙し  
くなります。覚悟して授業に参加してください。「老婦の語  
り」の残り、この部分の「謎」は8と9です。それでは、17  
句から20句まで、K rさん、読んでください。（K r 読む）。

Kwくん、難解語、ありますか？

Kw 「老嫗」<sup>⑥</sup>、「力衰ふ」、「請ふ」、「夜帰かん」<sup>⑦</sup>、「河陽の役」、「晨炊」<sup>⑧</sup>、それから……、「備ふるを得ん」。

T Kwくん、「夜帰かん」の「ん」の助動詞の意味、言ってくれるかな？

Kw 推量ですか。

T 推量なら、「夜に、行くだろう」、少し変だけど……。 「夜に、行こう」としたのが、おばあさんの心がはつきりすると思うんやけど、どうかな……。

Kw おばあさんが、自分の意志で行こうとしているんですか。

T その方がいいかなと……。なぜかは、あとで考えることにします。今日も、友情いっぱい授業ができそうやな。みんなのために、難解語の質問、たくさんKwくんが出してくれた。まとめて料理するから、しつかり聞いてくれるか。

—生徒提起の難解語の説明後に読みへ—

「老嫗」はおばあさん。おばあさんやから、Saさん、「力衰ふ」はどうなること……。カトッチョみたいに、髪、薄くなるんじゃないくて(笑い)、怒りっぽくなるんじゃないくて(笑い)……。 「力」が……。 Saさん、どうですか？

Sa 力が弱くなる、ですか……。

T そう、年取って力は無くなったけれど、「晨炊」、これ、「朝食・朝飯」(板書)ぐらい、できると、役人に言っている。

「晨炊に備ふるを得ん」が、それ。カトッチョも、力は衰えたけど、年取ったけど、掃除、サボッタ君らのために、朝早く来て教室を掃除してる、ゴミ捨てたり、黒板を消したり……。 「力は無くなった」が、みんなの少し役に立っている。今の嫌みです。(笑い)。嫌み、それぐらいにして授業に戻ります……。 「請ふ」の下に「願」(板書)を書いてください。<sup>⑧</sup>

役人に「願い出る」(板書)。そろそろ、「謎解き」を始めようか。その前に、「単身〇任」(板書)の丸の中に入る漢字を一字を、Suくん、入れてください。

Su 「ふにん」の「ふ」、漢字、わかりません。

T 「ふ」の漢字、むずかしいわな。みんな、「赴」<sup>⑨</sup>(板書)を入れてください。「おもむく」なら丸の中に入れた「赴」の方がいいんだけど……。 「帰」は「もとの所へ戻ってくる」(板書)、「赴」は、「…の方向に出かける」(板書)。杜甫は「帰」という文字に、行くけど、戻ってくる、という意味をこめたのかな……。 私もわかりません。みんな、考えてください。次に「謎」の8と9の謎解き……。 Soさん、19句と20句、読んでくれるかな。(So 読む)。「夜に帰かん」、「ん」は、



さつき推量より「意志」の方がよいかなくなって言っておいたけど、おばあさんは「行きましょう」って「申し出」(板書)たんやろか? Siさん、どうしてかな?

Si ……、わかりません。

T Siさん、今は、朝、昼、夜、いつかな?

Si 夜。2句に「夜」って、あったし。

T そう、今、「夜」……。おばあさん、今、「夜」のうちに、「行きましょう」って、役人に自分から申し出たんやな。19

句の「急ぎ河陽の役に應ぜば」、「急」の上に「早」か「至」をつけて熟語にするとわかりやすいかな。「早急」(板書)か「至急」(板書)、意味は「大急ぎで」(板書)……。 「役」は上に「労働」の「労」をつけて「労役」(板書)、「役」は「シンドイ仕事」(板書)ぐらいの意味かな。おばあさんは20句で「朝飯ぐらいつくることができるとって役人、申し出たわけやな……。なぜ、「今夜」のうちに言うって申し出たのかな? 「河陽」は、Smくん、「河陽」、時代背景のプリントにどう書いてあった?。確認してくれるかな。

Sm 唐軍が城をつくって、防衛している。史思明軍と戦っているところ。

T そう、激しい戦争があるとこ……。そんな「河陽」に、おば

あさん「晨炊」に行ったわけやな。Snくん、「晨炊」の意味、もう一度、確認してくれるか?

Sn 「朝飯」をつくりに。

T そう、「晨炊」は朝飯。じゃあ、おばあさんは、なぜ、朝飯つくりに行くって申し出たのかな? 「夜に急ぎ」……。 「大急ぎに夜に」(板書)と……。この時のおばあさんの気持ち、「謎」の9、推理してみようか……。思いついたこと、自由に言ってくれるか。Kwくん、どう?

Kw おばあさん、宿の外で役人と応対しているんですか?

T 役人、家の中に入っていないと思うけど……。

Kw おばあさん、役人を家の中に入れてたかたんじゃないんですか?

T どうして?

Kw 「孫の母」を連れて行かれると、大変だから。

T それ、もう少し、詳しく言ってくれるかな。

Kw おばあさん、孫をかわいいと思ってる。逃げたおじいさんの代わりに、孫の母を、連れて行かれないようにしたんじゃないですか……。それで、家の中に入れてないように、早く行くこと言ったんじゃないかと思えます。

T 孫には、自分より母が必要やと考えたということですか?

K w そうやと思います。年取った自分より、孫には母が大事だと考えて、「朝飯」ぐらい年取った自分にもできるし、「河陽」に行つて役に立つと……。

T おばあさんの、この時の気持ちについて、ほかの推理ありますか？

T a おばあさん、死ぬことも覚悟した……。息子二人、戦死しているし、「河陽」へ行つて、どうなるかわからへんし……。

T おばあさん、「死を覚悟した」(板書)。K w くんの見たと重ねると、「孫の命」、守るために……。ほかにはありませんか？ K m さん、何か言いたそうやけど、思つてること、言つてくれますか？

K m このおばあさん、すごい。すごすぎる……。

T 何がすごすぎるの？ みんなにわかるように言つてくれるかな？

K m おばあさん、自分の命、捨てて孫のため戦争やつてるとこへ、行こうとしてる……。これって普通、できへん……。自分の命より「孫の命」、大事に思つてる、このおばあさん、なんか、カッコイイっていうかあ、ホンマ、すごい……。逃げたおじいさんと違って、なんか、カッコイイ……。

T おじいさんは逃げて、おばあさんは孫とその母のために、死

を覚悟して「河陽」へ行くことを役人に申し出た。K m さんは、それを「カッコイイ」(板書)つて言つたわけやな。じやあ、逃げたおじいさんつて、「カッコワルイ」となるけど……、ホンマに、逃げたおじいさんは「カッコワルイ」んやろか？ 「謎」の10と11を解きながら、それ、考えてみようか。K i さん、21句から24句、最後まで読んでください。(K i 読む)。今、K i さんが読んだところでわからない言葉、あつたら出してください。

H g いっぱい、あります。いいですか。……。 「語声絶え」、「幽咽するを聞くがごとし」、「天明前途に登るとき」、「独り老翁と別る」……。ここ全部、分かりません。

T またまた、友情厚き人、H g くんの登場……。 (笑い)。授業の時間、足りるかどうか……。謎の10と11を解く前に、疑問解いておこうか……。20句と21句の関係は、どうやろ？ 場所が旅人が泊まった宿で変わってないけど、K m さん、何か、変わったことないかな？

K m 先生、場所、宿は変わってないけど、場所、変わってるんちゃいます。

T 場所が変わってる？ それ、もう少し教えてくれる？

K m さっきまで役人とおばあさんが話していたとこ、外、ちゃい

ます？ 21句と22句は、宿の中のことやと……。

T 同じ宿屋だけど、「外から中に」(板書)。K mさん、鋭い。

K m カトツチヨ、時間、「暮れ」から「夜」に変わっている。「久しくして」やから、夜、だいぶ遅くなってる。

T これも鋭い。それ、気づいてほしかったこと。夜が更けて、

「語声絶え」、「人の話し声が無くなって」(板書)、その代わりに、旅人の耳に聞こえてきたのが「幽咽」……。これ、「むせび泣く」(板書)。のどを詰まらせように泣く様子……。

「謎」10、「幽咽する」のは、誰やろ？ 語り手は語っていない。みんなの推理は？ 自由に出してくるかな……。

A s その前に、おばあさんは役人で行ったんやろか？ 朝飯炊きに……。

T 20句で「老婦の語り」は終わって、そのあと、21句やから、語り手はそれも語っていない。読み手が想像するしかない。

「老婦は役人と出かけたのか」(板書)。これ、メモしといてください。謎が一つ増えた……。この点も推理してください。この謎から先に推理しようか？ K rくん、どうや？ できれば推理の理由も挙げて……。

K r 飯炊きに行ったと思う……。役人、激怒していたし……。手ぶらで軍に戻れないんじゃないかと……。役人はもつと上の

役人に怒られるから、連れて行ったんじゃないですか。

T この謎を出した、A sくんは、どうですか……。

A s ……、自分から「朝飯ぐらい」できるって申し出たんやから、役人を引つ張るように行ったんじゃないかと……。孫のためにも、自分からさつさと……。

T 二人の意見、連れて行かれたと自分からさつさとは、少し違うけど、朝飯つくりに行ったことは共通している。行かずに家に残ったと推理する人、いませんか？ いないみたいやね……。宿には、おばあさんはいない。じゃあ、おばあさんの様子は、K rさんとA sくんの推理、どちらに賛成か。多数決、意味無いけど、みんな手を挙げてくれるか。挙げなかつた人もいるけど、だいたい、半々かな……。

S o 先生、いいですか。おばあさん、自分から行ったと思うんですが、A sくんが言った、さつさとじゃなくて、とほとほと行ったと思うんですよ……。さつさとじゃ、ちよつと元氣ありすぎやし、おばあさんやし、家に思いを残してうしろを振り返りながら、とほとほと……。

T さつさと、とほとほと……。A sくん、S oさんの推理、どう思う？

A s 様子は、S oさんの方が、おばあさんらしい……。でも、気

持ちはさつさ、じゃないですか……。

T 気持ちはさつさって？

A s 宿から役人を少しでも早く、離したい気持ち……。家ん中へ入られて八つ当たりされたり、孫や嫁さんに暴力ふるわれたらかなんと思つて、早く宿から離れたいと思つて……。でも、歩いてる姿はとぼとぼ……。Soさんの、うしろを振り返りながらは、俺、思いつかなかった。やつぱ、女性の方がデリケートなとこまで、イメージしてて、すごい。

T Soさん、Asくんが、デリケートなイメージ、ほめてるぞ。私もおばあさんの去っていく姿、イメージしてなかった……。謎の10を解くために、黒板に数字を書きます。数字なので横に書きます。

「1-3-1-1+(1) = 3+(1) (横書きで板書)、この数字の意味、わかるかな？ Kwくん、どうやる？

K w イコールのあと、2+(1)ならわかるけど。わからへん、カトツチヨ、ヒント。

T ヒント、無し。じつと、数字を見つめて、……。この詩、最初から読んで、数字の意味、考えて……。

K w カトツチヨ、わからへん、ヒント……。頼むから(笑い)。

T じゃあ、ヒント、最初の括弧のプラス1は、旅人です。これ

で、どうや？

K w わかったわ！ この宿の家族。

T Kwくん、この数字、説明できるか？

K w 最初、宿は七人家族、マイナス3は戦争に行った息子たち。次のマイナス1は逃げたじいさん、その次のマイナス1は婆さん。この家には孫と母と旅人、三人だけしかない。イコールの後の括弧のプラス1、わからへん。

T このプラス1、誰やる。これも謎にしときます。また、謎が増えた。七人家族だった家に、旅人を除くと、母と孫二人しか残っていない。これ、すごい数字と思わへん？ 何も悪いことしてへんのに、孫とその母二人だけ残して、この家からみんないなくなつた。二人の息子は戦死してしまつている。

「死者は長に已む」。子供の成長、見られへん……。謎10「啼いて幽咽する」のは、誰か。Saさん、誰やと思つ？

S a 孫のお母さん。  
T 孫は泣いてないの？ お母さんの様子は、どうやる？

S a 夜遅いので眠っている。お母さんが、しくしく泣いている。眠っている子供の傍で……。子供の顔を見ながら、これから

どうしよう、この宿はこれからどうなるのか、思いながら……。泣いてる……。

T 子供と宿のこと思いながら……。A sくん、S aさんの読み、

デリケートやな。わしみたいな感性の鈍い人間には、読めないことまで、(イメージ読み)してる。A sくんも、私も勝てへん。すごい。(笑い)。「聞くがごとし」は、「聞こえたようである」(板書)。寝ている旅人の耳に、その「幽咽」が、かすかに聞こえてきた……。「古池や蛙飛びこむ水の音」と一緒やな。S nくん、これ、知ってるわな。誰の句？

S n 松尾芭蕉。

T そう。どうして、「蛙」の「飛びこむ水の音」、聞こえるの？  
S n わかりません。

T 実験してみようか。席の隣近所で好きなこと、しゃべってください。(ボールペンを、教卓に落とす)。今、ボールペン、落とした音が聞こえた人。手を挙げてください。誰もいない。じゃあ、次、十秒間だけ、静かにしてください。いいですか。(同じように、ボールペンを静かに落とす)。聞こえた人？(ほとんど全員挙手)。静かな時にはかすかな音も聞こえる。(寝ている旅人の耳に、宿が静かだったから、「幽咽する」声がか聞こえたんやな。時間が無くなってきたから、23句、急いで説明する。「天明」は、天が明るくなる頃、「夜明け」(板書)。「前途に登りしとき」、旅人が、早朝に、「旅立つとき」

「石壕吏」(杜甫)の実践報告

(板書)。じゃあ、最後の11の謎、逃げたはずの老翁が、旅人に別れのあいさつに出たんやから括弧のプラス1は老翁です。

老翁、どこにいたのか、最後の謎解き、推理、がんばってみようか。括弧のプラス1、老翁だったとしたら……。[老翁]、どこにいたの？ 最後やから、みんな自由で推理、言ってください。

N i おじいさん逃げたけど、どっかに隠れて、役人とおばあさんのやりとりをこっそり聞いてて、役人たちがいなくなつてから、宿に戻ったんちゃいます？

S m 「夜」、やったから、隠れてたら見えへんし……。

A r 役人の姿を見て一度逃げたけど、役人が帰ったのをどこかで見てて宿に戻った……。

H y 宿にこっそり戻って、お嫁さんと二人で、おばあさんのことや息子のこと、今後のこと考えて泣いていた。二人が「幽咽する」のを、旅人は夜中に聞いてたんちゃいます？

T H yさんが言ったこと、旅人が聞いた泣く声は、二人……。

S aさんは孫のお母さんがしくしく泣いてたって、言つてたけど、H yさんは二人で……。どっちかな……。語り手はそれも触れてない……。老翁が宿に戻ったの、いつかわからないけど……。

M i やつぱり、夜中のうちにこっそり戻って、朝、作者に別れのあいさつした……。夜中泣いてたの、こっそり戻ったおじいさんとお嫁さんと二人。なんで、次々、この家から人がいなくなるんやとか、戦争を怨んだりして……。

T 夜中に泣いてたの、孫の母だけかおじいさんも一緒だったのか……。何も語られてないので、永遠の謎やな。みんな、考え続けてください……。時間、無いから、この宿で目撃したことに対する「作者の意見・感想」(板書)について意見交換して終わろうか。誰か? N o くん、どうかな?

N o 先生、5句6句以外に、作者の生の声、どこにもないけど、見たこと、聞いたことだけしか書かれてない。作者の意見、感想、わからへん……。

T そうやな、なんで杜甫は書かへんのやろか。この点、M t くん、どうや?

M t カトツチヨ、なんか、ヒント……。

T そうやな……。[左拾遺](板書)。これ、皇帝に意見を言う役職。杜甫はその役職だった。しかし、前に皇帝に意見したけど受け入れられずに、地方の役人に左遷されていた。旅の途中で泊まった宿で目撃した事件。これ、ヒント……。

M t 杜甫は役人やし、国のやつてること、直接きつい言葉、言え

へんとちゃいます。黙って見てるしかでけんかったんちゃいます。詩にも書けなかった。見たことだけ書いて、読む人に判断してもらうしかなかった……。

T なるほど、鋭い……。そういうことやろな。そろそろ終わるか。最後に、誰か、この詩に対する自分の感想、言ってくれるか。O k くん、どうやろ? 具体的に……。

O k 七人家族だったのに、今は、おじいさんと孫、それとお嫁さんしか残っていない。息子二人は戦死してる。おばあさんまで戦地へ……。この家、このあと大変やと……。ホンマ、この家、どうなるんやろか……。

T この家、ホンマにどうなるんやろ……。作者の生の意見、書かれてなくても、O k くんが言ってくれたように、作者の思いが伝わってくる。この詩、千二百年以上も前に創られたのに、国も時代も違うのに読者の心に響いてくる。今の君らに杜甫の心、伝わったとしたら、この詩は「文学的永遠性」(板書)を獲得している。じゃあ、終わるわな。次に、時代を少し遡るが、杜甫の社会詩の名作、「兵車行」の詩を読んでいく。今年の君らの授業態度、積極的で嬉しい。ホンマ、わし、少しやる気が出てきた……。やる気、出させてくれて、ありがとう。(笑い)。これからも、よろしくな、じゃあ、終

わかります。

### 三 生徒の受けとめたもの

「石壕吏」と次の教材「兵車行」の授業後、いずれかを選び読後感を書くことを課題とした。読後感を書く場合に、「できるだけ作品の語句を用いて、具体的に書くこと」、「用いた作品の中の語句にはカギ括弧を付けること」の二点を指示した。

この指示は、①読後感を書くにあたって「作品」を読み返すこと（授業を振り返ること）、②内容が抽象的観念的にならないこと、③紋切り型の、いわゆる「よい子作文」ではなく個性的に書くことを期待したためであった。プリントして配布した「石壕吏」の読後感の一部を以下紹介する。

1 私は、三つのすこいことを感じた。何といっても、老婦はすこい、の一言につきる。この一家を不幸のどん底にした「徴兵」、「二男は新たに戦死せり」と、そして「死せる者は長へに已む」と役人に向かって自分の思っていること、辛いことを堂々と言っている。「怒る」役人に負けないで、泣きながらも言っている。この点がすこい。さらにすこいのは、「孫」や「その母」を守るために、戦争の激しいところへ、「吏に従ひて夜帰かん」と朝飯づくり、「晨炊」に役立つからと申し出たことだ。三つ目は、この宿で見聞きし

「石壕吏」(杜甫) の実践報告

た出来事を、静かに描写している杜甫もすこい。

以上が、私の感じた三つのすこいことだ。この一家はこのあと、どうなるのか。老婦が無事に孫のところへ戻ってくることを祈りたい。まだ戦死していない「一男」も……。 (K mさん)。

2 老婦が恐い役人に応対し、家の中には、戦いに行ける者はだれもない、つまり、「室中に更に人無く、惟だ乳下の孫あるのみ」と役人に言ったのは、きつと、息子三人も戦争に連れて行つたのに、乳離れしていない「孫」、赤ちゃんまでも連れて行くのか、という怒りの気持ちを込めたものだと思う。二人の子供はすでに戦死させられているし、老婦は無茶苦茶悲しく、また無茶苦茶怒っていると思う。「存する者は且く生を偷む」というのは、手紙(「書」)を送ってきた「一男」だけではなく、老婦や孫や孫の母親や最後に見送りに出た「老翁」、全部の事だと思う。この宿の全員が、今生きていても、このあとどうなるかわからない。「且く生を偷む」の言葉に、なんか、悲しい響きがある。役人は、また逃げた「老翁」をしつつこく捉まえにくるのか……。 (N iさん)。

3 自分より「孫」には「母」の方が必要だと考え、自分から進んで、「請ふ吏に従ひて夜帰かん」と言った老婆は、本当に孫のことを大事に思っていると思う。生き残っている「一男」も、無事帰つてこられるかわからない。「孫」は男の子だと思ふ。そうすると、

この家には、「老翁」以外には、男の子はもう孫しか残っていない。だから、「老婦」は、この家の将来を考え、大きくなった「孫」にこの家を継いでほしいと考えたのだと思う。それで、自分は「力衰ふと雖も」、朝飯ぐらいはつくれるからと、兵士に「晨炊」ぐらいはつくれると申し出たんだと思う。「孫」を守ることは、この家を守ることだと思い、役人に「急に」行こうと言ったのだと思う。怒ってる役人に家の中に入られて、「孫」や「母」に八つ当たりされないように「急に」戦場の「河陽」に行くことを申し出たんだと思う。(Kaくん)。

4 激しい戦争が行われている場所、「河陽」へ、「老婦」は、何で、自分から進んで行こうとしたのか。誰だって自分の命が大事なことから、なぜ、そんな所へ自分から行こう言い出したのか。僕は、最初不思議に思っていた。授業の中で、役人が「老翁」を捉まえに来て、「老翁」が逃げてしまったんだから、いくら役人が怒ってもそのうち諦めて帰って行くと思っていた。それは甘かった。役人は、手ぶらで帰れないのだ。だれかを連れて行かなければ、下っぱ役人は上司に怒られるのだ。三人の息子を連れて行かれ、今度は「老翁」を……。しかし、「室中」には兵隊になれるような「人」はいない。「乳下の孫」と「母」しかない。「孫」や「母」を戦場へ行かせることはできない。諦めない「吏」に向かって自分が行くと言

うしかなかったのだ。年取って「力」はないけど、「晨炊」の仕事ぐらいできるからと……。残された「孫」と「母」を思って、しかたなく、戦場へ行くことを申し出たのだ。みんなの意見を聞き、謎解きの授業の中で、自分の甘さと考えの浅さを知った。今年の授業は、かなり深い。(Haくん)。

5 8と9の「謎」が解けたとき、この「老嫗」の思いがよく分かりました。本当は、おばあさんは、実家に戻らずにいてくれるお嫁さんと「孫」の世話をしながら、そばにいたかったに違いないと思いました。息子さん三人も戦争に連れて行かれ、そのうち、二人がすでに戦死しています。残りの息子さんもどうなるか分かりません。「且く生を偷む」ことができるかもしれませんが、命の保証はありません。三人とも戦死してしまうかもしれません。おばあさんに残されているのは、「孫」だけなのです。おばあさんは、このお孫さんだけは何としても守りたかったのでしょう。そのために「河陽」へ自分から行くという悲しい申し出をしなければならなかったのです。役人が家の中に入らぬようにして、この宿の唯一の子供(孫)を守るために「急に」行きましようと思し出したのだと思います。「孫」と離れることは、おばあさんにとっては「断腸の思い」だったと思います。強くて優しいおばあさんは、必ず、お孫さんの待つている家に戻ってくると思います



追伸 カトッチョ、「謎解き」の授業、楽しかったよ!!

杜甫って、ヤツパ、天才——(Mおさん)

生徒の読後感に対する分析を、「はじめに」に記した「同志社香里『教育研究誌』36号」に記したが省略する。(文中の「カトッチョ」は、生徒・教師の私に対する呼称)。

まとめにかえて

重い教材を教室で(読む)ことが年々困難になってきている。

社会全体の軽佻浮薄な文化的状況、政治的社会的に腐敗堕落した現実の中で生き、真実を覆い隠されている生徒たちはそれでも日々を懸命に生きている。一方、「教室」は生徒たちが求める真実を学びたいという要求に応えられていない。いわば「偏差値王朝」ともいべき現場にあつて、「点取り競争」≡「偏差値向上競争」に巻き込まれ教師は、「数字管理者」として「格差社会」を生み出す先兵役を果たしている。私もその一人であると自省している。

文学教育の基本は教材の中の一語一文を丁寧に(読む)ことであると考え。その上で、文学教育の果たす役割は、教室の中で他者(友人や教師)と自由に語り合いイメージを出し合いながら(相互に刺激し合いながら)、自己と世界の認識を深め、真実を見極める主体形成、行動主体形成に寄与することにあるとしたい。しかし、

「石壕吏」(杜甫)の実践報告

今、教養主義的な授業や「点取り競争」と化した授業(読まない!! 読ませない!! 考えさせない授業)が全国的に蔓延している。

日本古典や日本漢文、漢文(漢詩)を文学教育として成立させるには多くの課題がある。その一つに言語抵抗がある。生徒が言語抵抗を乗り越え、その先にある豊かな世界を生徒には手に入れてほしいと願う。そのためには、古典文学教育の方法論、指導過程論、何よりも教師が社会状況を見据え、生徒の現実的課題や問題意識に合致する教材開発や教材研究をするとともに、各時代の文学研究と文学教育とを架橋することが不可欠であると考える。

#### 注

① 「高等学校学習指導要領国語編」(文部科学省・教育出版社・平成二十二年六月十五日発行)の「内容の取扱い」に古典の「教材」に関する事項は各科目ごとに次のように規定している。

「国語総合」は「古典を教材とした授業時数と近代以降の文章を教材とした割合は、おおむね同等とすることを目安として、生徒の実態に応じて適切に定めること。なお、古典における古文と漢文の割合は、一方に偏らないようにすること」(「授業の割合」)、「古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。また、古典に関する近代以降の文章を含めること」(「古典の教材」とあり、割合、教材について定めている)。

「古典A」では「教材には、古典に関する近代以降の文章を含めるこ

と。また、必要に応じて日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること」(「教材の種類」とし、「日本漢文」の教材について触れている。

「古典B」には「古文及び漢文の取扱いに關する事項」に「古文及び漢文の両方を取り上げるものとし、一方に偏らないようにする」とあり、「教材の種類」の項では、「教材には、日本漢文を含めること。また、必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論文などを用いることができること」とし、「日本漢文」を強調する。

- ② 桑原武夫「白楽天の社会詩は人類の歴史の上での一つの輝かしい宝」(『新唐詩選続編』吉川幸次郎と共著)。以後「社会詩」の用語が定着する。

- ③ 教材は書き下し文を付したプリントを配布した(教材参照)。授業で用いる教材は全て同様になっている。授業後には「過保護」を意識しつつも現代語訳のプリントも配布した。

- ④ 「走」を使用教科書では「走り」と訓読している。『漢字源』の「走」の項②は「『動』にげる(にぐ)。はや足でにげる」とし、「遁走(トソウ)」「三十六策、走グルハ是レ上計ナリ」南齊書』の用例を挙げている。場面の状況を踏まえ「走げ」とした。また新釈漢文大系90『史記』列伝三「淮陰侯列傳」は、「趙見我走、必空壁我遂(趙、我が走ぐるを見るや、必ず壁を空しくして我を逐はん)」、「於是信・張耳、詳弃鼓旗走水上軍(是に於て信・張耳、詳りにて鼓旗を弃て水の上の軍に走ぐ)」等の「走」を「走ぐ」と訓読する。この点も参考にした。

- ⑤ 「老翁」が『悪いこと』をしたから「史(役人)が捉まえにきた」という意見は想定外の意見であった。この詩の時代、背景、唐の徴兵と無関係な意見である。いわゆる誤読ではあるが、この「誤読」を生かすことによって〈読み〉を深めるものと判断し新たな「謎」の提示とした。

「誤読」も授業に生かすことができると考える。

- ⑥ ある場面において、登場人物の様子や心情、表情などのイメージを出し合い、場合によっては、動作化して教室で交流し合うことにしている。表現されていない登場人物の発したであろう言葉(セリフ)をイメージして創作してもらう場合もある。時には荒唐無稽なことを言う生徒もいるが、概して、形象を深く読み合う方法として有効である。他者のイメージから刺激を受け自己のイメージを交流しそれを教室で共有し合うことで互いの〈読み〉が深まりを見せる。「イメージ読み」と名づけ、長年、古典(日本古典)や漢文の授業において実践し続けてきた。生徒たちの直観的なイメージ力によって教材の〈読み〉が深まり、そこから立ち上がる生徒の〈読み〉を文学教育の根幹に据えたい。

- ⑦ 漢文(漢詩)の授業では、時折、古典の文法的事項の説明をする。漢文(漢詩)の訓読は古代人の先達による日本語訳であり、書き下し文を読むには古典を読む力が必要であることを意識させるためである。古代から現代まで読まれている漢文を「日本古典」として扱い読んでもよいのではないかと考える。

- ⑧ 1時間目で2句の「捉」を「捕捉」、3時間目で11句の「存」の上に「生」の字を加え「生存」、12句の「死」の下に「亡」を加え「死亡」とすること、つまり、生徒が身につけている「熟語」で考えることを指導した。生徒の理解を深めるためには有効な方法である、この後の「急」は「早急」、「役」は「労役」を、時間の都合で授業者が提示し「熟語」を意識させた。

- ⑨ 漢文に用いられている漢字を、生徒に馴染みのある漢字に置換することで、生徒の理解を容易にすることができる。例えば、「踰」は「越」、「前」は「進」、「儻」は「盗」、「已」は「止」、「長」は「永」などに置換する。

⑩ 数式は宿の一家が徴兵のためにこの家を去った状況を端的に示すためであり、投宿した旅人と「老婦」の戦場行き犠牲によって徴兵を逃れた「老翁」を意識化させる方便である。

⑪ 「石壕吏」には作者が直接的に主観を述べる語句はない。かつて、「左拾遺」の地位にあった作者は、「石壕村」に投宿し、この宿を襲った悲惨な徴兵の実態を目撃したとき、左遷された一地方役人にすぎなかった。杜甫は、民を襲った悲惨な徴兵に抗すべき有効な術を持っていなかった。この宿に起きた実相を、客観的に描写する方法しかなかったのである。

しかし、逆にこの表現方法によって「石壕」の宿に起きた一事件は普遍的な事件となり、その悲劇性を読者にリアルに伝えるという効果を生み出している。つまり、この表現法によって「石壕吏」の詩は、今日の読者の心に響き繋がる「文学的永遠性」（文学的眞実性）を獲得したと言える。生徒にこのことを認識してほしいと意識した提起である。

⑫ 注①に同じ。「学習指導要領」の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、高校において「日本古典」とともに漢文・漢詩の授業が今後重きをなし、「日本漢文」が重要視されると予想される。今後の「日本漢文」の教材開発の折には、菅原道真の讃岐時代や太宰府流謫後の、日本の「社会詩」ともいえるべき漢詩を視野に入れた教材研究と実践を期待したい。

教材

石壕吏(唐)杜甫 石壕の吏

- 1 暮投石壕 郵
- 2 有吏夜捉人
- 3 老翁踰牆走
- 4 老婦出門看
- 5 吏呼一何怒
- 6 婦啼一何苦
- 7 聽婦前致詞
- 8 三男鄴城戍
- 9 一男附書至
- 10 二男新戰死
- 11 存者且偷生
- 12 死者長已矣
- 13 室中更無人
- 14 惟有乳下孫
- 15 孫有母未去
- 16 出入無完裙
- 17 老嫗力雖衰

- 暮に石壕の郵に投ずるに  
吏有り 夜人を捉ふ  
老翁 牆を踰えて走げ  
老婦 門を出でて看み  
吏の叫ぶは 一に何ぞ怒れる  
婦の啼くは 一に何ぞ苦しき  
婦の前みて詞を致すを聴くに  
三男は 鄴城に戍れり  
一男 書を附して至らしめ  
二男は 新たに戦死せりと  
存する者は 且らく生を偷むも  
死せし者は 長へに已めり  
室中 更に人無く  
惟だ 乳下の孫有るのみ  
孫に母有り 未だ去らざるも  
出入に 完裙無し  
老嫗 力は衰へたりと雖も

- 18 請従吏夜帰
- 19 急応河陽役
- 20 猶得備晨炊
- 21 夜久語聲絶
- 22 如聞泣幽咽
- 23 天明登前途
- 24 独与老翁别

- 請ふ 吏に従ひて夜に帰かん  
急ぎ河陽の役に応ぜば  
猶ほ晨炊に備はるを得んと  
夜久しくして 語聲絶え  
泣いて幽咽するを聞くがごとし  
天明 前途に登りしとき  
独り 老翁と別れしのみ

「メモに使ってください」